富士の民話 あれこれ

禁酒の神様 木の宮さん

富士東高校の西側に小高い森が見えます。これが「木の宮神社」です。この神様は、厄よけの神様として知られ、禁酒の神様でもあります。

今回は、社中（木の宮神社を守っていこうと集まった有志）総代の荒川一郎さんから、木の宮さんにまつわるお話を伺いました。

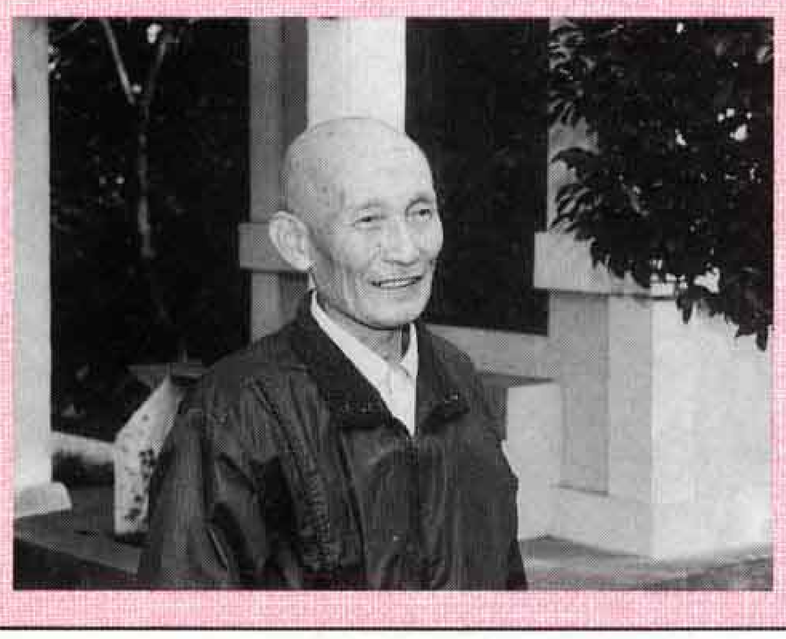
木の宮さんは、神々の中でも美男子で利口者でしたが、どうも働くのが嫌いで毎日大酒を飲んでいました。

ある日のこと、木の宮さんは悪友を誘い、晩秋の空にくっきり浮かぶ新雪の富士を仰ぎ、狩りに行きました。結果は上々で、その夜の酒宴は、いつになく盛んでした。

何時間か過ぎ、酔いつぶれた木の宮さんの耳元をくすぐる者がいました。うるさいので払いのけたのですが、また耳をつつきます。木の宮さんが怒ってはね起きると、足元に一羽のホオジロがいることに気づきました。さらに周りを見渡すと、一面が火の海になっています。木の宮さんたちの不注意な残り火で、森や草原は真っ赤な火に包まれていきました。

命からがら逃げることができた木の宮さんは、自分を助けてくれた小鳥のことを思い出し、涙を流しました。それ以来、木の宮さんは酒も狩りもやめ、多くの人たちに慕われる神様になりました。やがて森にも緑が戻り、木の宮神社の周辺は、小鳥たちの楽園になりました。

この話から木の宮さんは禁酒の神様と言われていますが、実は「杉ほこわけの命（みこと）」という植林の神様なんです。昔、このあたりは野火（山火事）が多かったので、せっかく育った木が燃えてしまうこともありました。それに神社の森に鳥が多いのも事実。神社の周辺は、すばらしい自然に恵まれているからです。つまり、この話は、自然を大事に守りなさいという教えなんだと思います。



荒川 一郎さん（今泉）

こちら編集室

ことしは梅雨らしい梅雨もなく、夏は猛暑に見舞われ、異常気象の年でした。秋の訪れも遅く、私の好きな晩秋に心を浸す間もなく、冬が訪れました。

今回の広報ふじは、ことし最後の発行。1年間情報の提供や取材にご協力いただき、ありがとうございました。

今、編集室では、平成7年元旦号の編集に取り組んでいます。きょうもボスの号令に編集室は右往左往。見て楽しく、読んで楽しい広報紙づくりに一同頑張ります。これからも皆さん応援してくださいね。（サブボスの乙女）

人口 232,154人
男 115,730人 女 116,424人
世帯 72,597世帯 （11月1日現在）
発行・編集 富士市総務部広報広聴課
富士市永田町1-100 ☎51－0123

ちきゅうにやさしい 富士市

広報ふじは再生紙を使用しています。